

令和5年度

鹿児島県の教育

1月号



巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
日置市立湯田小学校長
鹿屋合校長協会小学校長部会副部長

山下 孝一郎

かしこく ゆたかに たくましく
夢に向かって歩み続ける子供たちに

三十八年振りに日本一となった阪神タイガース岡田監督の胴上げと一緒に宙を舞った番号二十四のユニフォームに涙した。昨年七月十八日に二十八歳の若さで亡くなった横田慎太郎さんは本校の卒業生である。彼が野球を始めるきっかけとなった湯田ソフトボールスポーツ少年団の創団五十周年記念大会の開会式にお越しいただき、球児のみんなに『夢を諦めるな！』と激励の言葉をいただいた。その後の始球式では、バッターの横田さんに、大暴投する大変お恥ずかしい場面となったが、彼と少しだけ話をする事ができた。病

気の影響で口数は多くはなかったが、非常に誠実で、野球を愛し、子供たちの成長を楽しみにしている心温かさを感じた。再会は叶わなかったが、特集される番組を観るたびに彼のことを誇りに思った。

創立百五十三周年を迎えた本校からは、彼以外にも多くの県内外で活躍する先輩方を輩出している。地域の皆様が本校教育に積極的に関わってくださる素晴らしい校区である。今から二十年以上前の平成十二年に、子供たちの健全育成とともに、地域の活性化や住みよい町づくりを目的として地域の有志の方々によって「湯田校区子供を育てる会」が発足した。本会の会員が中心となり、子供たちに昔の遊びや生活等の体験をさせる「ふれあい達志塾」を年二回夏と冬に開催し、PT

Aも後援となり多くの子供たちが参加している。

近い将来、多くの職業がAIに取って代わると言われているが、人を育てる教育は、人にしかできない職業だと思う。だからこそ、私たち教職員・大人の役割を改めて考えたい。未来社会を担う子供たちのためにGIGAスクール構想によりタブレットが配備され、学びのツールとして活用している。未来の職場では、多くの作業をAI/人工知能をもったロボットがやるようになると思うが、ロボットに指示を出したり操作確認したりするのは人間である。そのためには専門的な知識や技能が必要になるが、それを支えるのは義務教育段階の基本的な知識や技能、思考力・判断力・表現力に加え、学びに向かう力や人間性等である。特に、人間性については、人と人とのふれあいの中でしか身に付けられないものと考える。

コミュニティ・スクールとして、保護者や地域のみならず、多くの専門家や職業の方々の力を借りながら、校訓「かしこく ゆたかに たくましく」の具現化をめざし、未知の社会でも、たくましく生き抜く子供の育成に努めたい。併せて、横田先輩のような、夢実現のために粘り強く努力を続ける子供を育てていきたい。

令和6(2024)年 1月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	14
随想	2	読書案内	16
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	12		



地域の宝 歴史と自然を活かす

中種子町文化財保護審議会会長 鎌田 秀一郎

西之表市から国道を車で五十分、中種子町と南種子町の境近くに歴史の里坂井公園があります。周辺には樹齢六百年を超える日本一の大ソテツ、三万五千年前の旧石器時代の生活跡が発見された国指定立切遺跡、そして照葉樹林に囲まれひっそりと佇む国指定重要文化財古市家住宅があり、太平洋側の地域を含む歴史・文化ゾーンを形成しています。

退職後地元に戻り、古市家の管理人を務めたことがあります。その時の経験をもとに記述してみたいと思います。

古市家のルーツは、十三代古市秀一氏が建立した墓碑銘に「…永祿年中種子島家より招かれて河内国古市郡より来島せし」と記されています。鉄砲伝来の十四代島主種子島時堯の時代で、畿内の堺市との交流が盛んな頃です。現存する住宅は、江戸末期の弘化三（一八四六）年、当時庄屋・横目の職にあった古市源助によって建てられた、種子島を代表する民家建築と云われています。当時の建築技術の一つで、煤で黒くなった大きな梁に手斧（ちような）で削った跡が残っています。カンナが無かった時代のこの技術は、鹿兒島城（鶴丸城）の御楼門のケヤキの梁に見事な手斧仕立を見ることができま

す。瓦葺の杉板の平木は今も朽ちておらず、お

そらく屋久杉ではないでしょうか。種子島は湿気が多く、シロアリ対策として基礎石と柱の間に銅板を挟んだり、板間の材料に防虫効果のある楠（たぶ）の木を多く使っています。

一方、建物の保存とともに、活用にも取り組んでいきます。地元南界小学校古市家塾が開かれており、習字教室、そば打ち体験、ひょうたん絵付けなど子供たちと一緒に地域のボランティア活動を行う拠点にもなっています。また、三月の雛人形展示や、古市家に縁のある古市玲子さん作の木目込人形展示は、古民家の雰囲気によく合っ

て恒例の行事になっていますが、その保存方法が課題です。

余談になりますが、古市秀一氏は、本土で教職に就かれた後、帰郷、中種子町教育長を務められました。古市家から発見された文書の中に先生の赴任先が書かれたメモがあり、昭和二十四年から三十一年の間、鹿兒島市名山小学校、



略歴
昭和四十六年三月 熊本大学法文学部卒業
平成十九年三月 鹿兒島県職員退職
平成十九年四月 養護老人ホーム施設長
平成三十年十二月 中種子町教育委員

山下小学校の校長を歴任されました。

これはたまたまの話ですが、鹿兒島から見学に来た方が昔名山小学校に在学していた時のこと、花壇の草取りをしていたら古市校長先生にほめられたのを覚えていると懐かしく話してくれました。また、私事で恐縮ですが、小学二年生の時、初めて種子島を出て鹿兒島の病院に入院し、病室の窓から自分の学校よりはるかに大きい山下小学校の様子をいつも見ていたことを覚えていますが、いずれも偶然のことですが、何か不思議な巡り合わせを感じます。

坂井公園の周りは、照葉樹林のスタジイヤツマベニチヨウの食草のギョボクなどの植生が見られ、さらに東海岸に至る川にはいろいろな種類の生物が生息し、さらに下るとマングローブ林が広がる自然豊かな地域です。夏休みには、小学生が自由研究の課題を探しにやって来ます。昔の学童疎開の縁で中種子町と交流が続いているさつま町の子供たちが、マングローブ林でアナジャコを見つけ、トビハゼを追いかけた姿が印象に残っています。

先人が残した貴重な教えや技術を学び受け継いで行くことが重要であり、また、歴史と自然が共存する地域の活用を今後更に進めて行く必要があると思います。



「授業がよくわかる」とは

「魅力ある学校づくり」を通して

三笠中(北) 徳重忠彦

一 はじめに

数年前に参加した研修会で、講師から「清掃時間に巡回していると、男子がふざけて遊んでいる。先生ならどのような指導をするか。」との質問があった。私の考えは、「厳しく指導する。」であるが、講師は、「厳しく指導する前に、自分の作業場所を黙々と雑巾掛けをしてしている生徒に気が付いたか。この黙々と清掃している生徒たちに注目してほしい。生徒への意識調査を基に、職員が改善を重ね、全ての生徒が、「明日も学校に行きたい。」と実感できる取組が「魅力ある学校づくり事業」である。」と話された。

本校は、阿久根市の北西に位置し、自然豊かな脇本海岸と約千五百本の紫陽花が咲きほこる笠山に囲まれた風光明媚な環境にある。そして日本電気電信の父と呼ばれ、第四代の文部卿および外務卿を務めた寺島宗則の故郷である。

現在、生徒数百二十八名、教職員数は十八名で、「自主・協調・持続」の校訓のもと、教職員が心を一つにして教育活動の充実に努めており、保護者や地域も教育への関心が高く協力的で、PTAの参加率は八割を超えている。

二 「魅力ある学校づくり事業」の取組を通して
平成三十年度の不登校の生徒は十一名であり、当時の全国平均値の約六倍であった。こ

のような状況を踏まえ、令和二年度に、県の「魅力ある学校づくり事業」の指定を受け、県や市の指導・助言を受けながら、全教職員が「不登校対策」「豊かな心の育成」「学力向上」の三つのプロジェクトチームに分かれて意識調査と改善へ向けての取組を始めた。その結果、令和二年度以降、不登校の生徒は減少し、令和四年度は三名となった。この四年間において、国や県が重視する「新規の不登校の生徒」は一名で、この生徒も今年度から登校している。また、二年間の指定以後も、毎学期に「魅力ある学校づくり事業」の意識調査を行い、結果を基にした職員研修を継続しているところである。

さらに、毎月「魅力ある学校づくり委員会」を開催し、各チームの進捗状況や改善点等について話し合いを行うとともに、翌月の具体的な活動につなげていく。このような取組が新規の不登校の未然防止につながっていると考

三 学力を向上させる手立てとは

プロジェクトチームにおいては、計画的な家庭訪問や個別指導、異学年による教え合い学習等の提案がなされ、教職員による「居場所づくり」や生徒間による「絆づくり」が進んでいる。成果は確実に表れているが、課題も山積している。意識調査には「授業がよくわかる」という共通質問があるが、教職員の

ほとんどが、学力を向上させる手立てとして、宿題や個別指導等の授業外の取組を意識しており、このことが大きな課題であると考えている。令和五年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙において、「授業がよく分かるか」の問いに対し、三教科の平均は十五・四％(全国三十二・八％)であった。このことから、北薩教育事務所「北薩の授業づくり三ポイント」を活用して、「ラスト十分の充実」を「この十分間で生徒が「分かった」を実感し、「振り返り」を次時に生かす授業づくりをめざしている。

四 おわりに

冒頭で述べた講師の話は、全ての子供たちに注目するという意味では、改訂された「生徒指導提要」にもある発達指示の生徒指導の考え方につながるものではないか。不登校の要因は多岐にわたっており、その原因として、学業不振もその一つになっていると考えられるからである。全教職員が「分かった授業」を意識して取り組むことは、子供の成長、発達を支え、不登校を未然に防止するカギであると考ええる。授業で生徒の学習状況を把握した上で「指導の個別化」や生徒の興味・関心に応じた「学習の個性化」をめざして、指導の工夫をし、「どの子供も分かる授業」、「どの子供も面白い授業」を心掛けることが、学業への意欲を高めることへつながり、「魅力ある学校づくり」の大きな一歩となるのではないかと。令和六年度から本校は、近隣の折多小学校、脇本小学校の二小学校と施設分離型の小中一貫教育を開始する。小学校と連携を図り、「ラスト十分の充実」を三校の共通実践事項の一つとして定めた。子供たち全員に、毎時間一つでも「分かった」「できた」という成就感を味わわせ、全ての子供たちが「明日も学校に行きたい」と、明日を心待ちにする学校をつくっていききたい。



ICT活用あれこれ

南大隅高 鏡山 晃 央

一 はじめに

昨夏、全校生徒八十四人に宿題を課した。一学期終業式で、令和七年度に創立百周年を迎える本校のキャッチフレーズを「百周年に向けて飛躍しよう」(Next Stageへ)と設定したことを説明し、商業科で学ぶ者の一人として自分を売り込むキャッチコピーを作ろうと促したのだ。時間にゆとりのある夏季休業を利用し、自分と向き合い、自分を見つめ、自分のことを少しでも理解させようと試みた。そこで活用したのがICTである。

二 活用の実際

七月下旬の体育館内はさすがに暑かった。熱中症対策を入念に行い、大型扇風機がうるい声を上げる中、終業式ではスライドを使用した。全校朝礼等で生徒に話をする場合、声だけでは十分に伝わらないときがある。その際、話の内容を補うために文字・図・写真・音楽などの情報を加える。これはこれまで指導いただいた校長先生方の実践から学んだもので、生徒を前に楽しそうに「授業」されていた記憶がある。それを思い出しながら挑戦したのだ。

キャッチコピーの意味や自己分析の仕方な

どを紹介した後、アンケートフォームを通じて提出するよう説明した。二次元コードを読み込ませ、専用フォームに導く。そこで、学年・番号・氏名・作品等を入力し、送信を押せば課題提出は終わる。締切りは二期始業式と念を押した。生徒らは、ステージの壁一面に映し出されるスライドにうなずいていたと思う。各教科から多くの課題があるのに、校長の宿題もある。いったいこの学校はどうなっているのか?と校長室に飛び込んでくる生徒はいなかった。就職試験や大学受験に備え、自己PRに応用できるように取り組ませてみた。

- ・人のやる気の着火剤
- ・相手の心と会話できる人間です。
- ・笑顔やる気元気一〇〇%
- ・みんなの太陽

など、強みや良さをアピールするものが出てきた。集計は簡単で提出者も一目瞭然である。これを話題に生徒へ言葉かけもできる。普段から意欲的に発表し、社会で働く上で役に立つスキルを学んでいる生徒たちである。必ず独自に表現したものを送信してくれると期待していた。

この課題をもとに、七月に文科省から発出された「児童生徒の自殺予防に係る取組について」の「健康観察・教育相談アンケート」も作成した。夏休み開始には間に合わなかったため、八月後半の補習期間から活用を呼びかけ、状況把握につなげている。

また、十月に実施された「燃ゆる感動かごしま国体」自転車競技(トラック)では、地元自治体の要請もあり全校で三日間のボランティア活動を行った。接遇教育の一環とした取組の感想を求めたところ、「夏季課題」よりも多い、ほぼ全員が回答が得られた。それぞれが担当した係で来場者をもてなすことができ、有意義で貴重な体験だったなど、所期の目的は達成できたようだ。集まった感想は町にも届けた。

このように生徒の状態や思いを把握したい場合、ICTを活用するというスタイルができたが、これに留まらず校内外の様々な場面での活用を考えている。

三 おわりに

今年度始めに授業第一主義を掲げ、学力向上と「わかる授業」実践のためにICT機器の効果的な活用や工夫をお願いしてきた。研修等を通じて職員の活用も徐々に増えており、少しずつ当たり前の風景になりつつある。ICT活用とは名ばかりの、きわめて初歩的で、すでに多くの方が取り組んでおられることだが、校長でもできる、校長でさえ使っているのだからと、学校全体を巻き込んでいきたいと思う。小規模校でのささやかな試みをもって提言としたい。



地域に根ざした教育を通して「生きる力」をもち 新しい時代を拓く「幸田の子」を育成する

幸田小(始伊) 緒方美保

一 はじめに

本校区は湧水町の南西部に位置し、つなぐ棚田遺産(旧棚田百選)の「幸田の棚田群」をもつ自然豊かな田園地帯にあり、稲作を中心に茶業、花卉園芸、畜産等の盛んな地域である。

本年度創立百四十二年を迎えた歴史と伝統のある学校であるが、過疎化が進み、完全複式三学級、特別支援学級二学級の計五学級、全校児童二十人、職員十四人の極小規模校である。

二 学校経営の方針

湧水町は平成十七年に「人権尊重の町」を宣言し、町ぐるみで人権教育に重点を置いた取組を行っている。本校でも人権尊重の精神と生命尊重を基盤とし、持続可能な社会の創り手となる児童の育成を目指すとともに、地域に開かれた学校となるよう努めている。

そこで、学校教育目標を「生きる力」をもち新しい時代を拓く「幸田の子」とし、「瞳輝き 笑顔あふれる 幸田の子」のキャッチフレーズの下、少人数でも物怖じしない子どもに育つよう「あいさつ日本一」の学校にならう」を合言葉に、友達や先生、地域の方と元氣なあいさつを交わすことを呼びかけている。地域を知り、地域を愛し、大人になってふるさとの発展に寄与する子どもを育てたいという思いから、「飛び出せ学校、呼び込め地域」をモットーに、体験を中心に生活科や総合的

三 具体的な取組

(一)

な学習の時間に地域を生かした教育活動を行い、大人との関わり方やコミュニケーション能力を高めるようにしている。

子どもに気付かせる人権学習

学校楽しいと等のアンケートを取ると、児童の自己肯定感は何回低い結果になる。年三回全校で人権学習を行い、自己肯定感を高める活動に取り組んでいるがどうにも向上しない。保護者に結果を知らせると、「子どもたちは当たり前前を当たり前にしてるので、特別いいことをしていいのとは。」という答えが返ってきた。なるほど。

人権週間(月間)には、人権に関するアンケート結果をまとめ、児童会が発表し、各学級も取組の結果と今後の目標を発表している。形式的な発表だけでなく、教師主導で子どもに本心に迫るワークショップ等を取り入れ、人権や自己肯定感に気付かせるよう取り組んでいる。

また、子どもたちにより刺激を与えるため、年一回は外部講師を招いて、保護者と一緒に人権教室を行っている。

高学年では、「差別に負けない、差別を許さない力」を育むため、教科書で学習することをさらに深める学習を総合的な学習の時間に位置付け、差別の歴史や差別されてきた人の思いについて、学習している。

(二)

農業体験を通したコミュニケーション能力の向上
校区内にある棚田で米作り体験ができたかと思案していたところ、役場から「棚田で米作りをしないか」という声かけがあった。役場担当課や地域おこし協力隊と連携を図り、役場全面協力の下、米作り体験を計画した。地域や保護者にも声かけをし、田植え、稲刈り、脱穀、わらを使った注連縄作り、餅つき等を地域指導者と共に体験している。老若男女で交流が生まれ、新しい体験が得られるとともに、分らないことを尋ねる等の経験を積ませることができた。

(三)

また、低学年で行うサツマイモ栽培では、地域講師を招いて、植付けや収穫、サツマイモ料理にも挑戦するなど、農業の楽しさや食べる喜びを味わうとともに、大人へのあいさつの仕方や関わり方を学ぶ機会を得ている。
福祉体験を通したコミュニケーション能力と高齢者への思いやりの心の高揚
社会福祉協議会に依頼し、高齢者体験を行っている。装具を着けたり、介助をしたりする活動を行う。その後、校区内のデイサービス施設の協力を得て、高齢者との交流を行う。高齢者体験を生かして、相手の立場に立った行動や思いやりの心を育てるようになっている。

四 おわりに

本校区は、地域住民が全校児童のことを知っていただけるような地域である。地域行事もまだまだ盛んで、地域と保護者・児童が一体となつて行われる活動も多い。子どもがとて大事にされておる、子どもも大人との交流を楽しみにしている恵まれた地域である。しかし、大人がお膳立てし過ぎて子どもが考えなくてよい場面が度々ある。どんな子どもに育てていきたいかを共有し、今後もさらに地域と連携を深め、自ら考え、行動でき、「幸田に生まれてよかった。幸せ田なあ。」と言える子どもを育てていきたい。



自己変容のコーディネート

錦江湾高 石塚 一哉

一 はじめに

創立五十三年になる錦江湾高等学校は、県内初となる理数科（二クラス）と普通科（四クラス）からなり、文部科学省SSH事業第IV期の二年目を迎える。「自立創造」「向学求真」「誠実協調」の校訓、建学の精神を受け継ぐ教育活動を行っているが、募集定員を充足できない現状である。少子化、情報化など、社会情勢の変化とともに在籍する生徒や職員の意識、校風は大きく様変わりした。

二 思い込みからの脱却

概して進路実績結果の判断で、学校あるいは生徒の資質・能力を評価する傾向が強い。この決定づけられた評価による先入観や固定概念を払拭することは甚だ難しい。そこで職員や生徒が抱く本校に対するマイナスのイメージや評価を取り除くことが急務であると考えた。まず職員、生徒に「人（生徒）は無限の可能性を秘め、どのようにでも変容できる存在である」ことを意識することを講話のたびに話した。次に、自分で考え、判断し、行動できる力を身につける重要性を説いた。コロナ禍を経て予測不能な状況に陥ったとき必

要な能力として痛感したからである。

三 スクールミッションの共通理解

本校のスクールミッションが「探究活動を通して誇りと好奇心を原動力に生徒一人一人が何事にも挑戦する態度を育み、自らの将来を論理的・科学的にデザインし、グローバルな視点で社会に貢献する人材の育成」として期待される社会的役割が示された。これを実現化するために経営方針の柱に自己指導能力の育成を掲げ、あらゆる教育活動において「自己存在感」「共感的な人間関係」「自己決定」の場を設定することを全職員に要求した。

本校の特色であるSSHを生かし、探究活動の出発点となる「気づく力」に着目し、生徒がやりたいこと、好奇心をくすぐる研究テーマを設定する支援に重点を置いた。自分が好きでやりたいことであれば、たとえ失敗しても何度でもやり直すからである。従来見過ごしてきたことに当たり前（常識）を疑う、意識して身の回りを見るなど、生徒は主体的に取り組んでいた。この好きだから楽しむ姿勢を職員が率先垂範することを個々にお願した。校長の考えや思いを管理職から各部主

四 自己変容を目指して

任、そして個々の職員へと浸潤させた。生徒が気づくこと、考えること、挑戦することを楽しみながら活動できるように各職員が創意工夫を凝らした学習活動を試みた。

職員の支援によって、生徒に自己変容（成長）を実感させる場の設定を図った。特に今年には本県開催の二つの全国大会が絶好の機会となった。第四十七回全国高等学校総合文化祭「自然科学部門」において、地学の研究発表は最優秀賞を受賞し全部門で入賞した。また、かごしま国体「剣道少年女子」において、本校の教諭は監督として、二人の生徒は選手として優勝に導いた。この二つの大会では、裏方としても生徒や職員が実行委員長をはじめ多くの役割を担当し活躍した。その他にも「理科好き集まれ！錦江湾高校サイエンス部体験イベント」にて、生徒主体の実験やプレゼンテーションを中学生や保護者へ披露した。これらの体験後の感想・アンケート結果から、自信がついた、やる気が湧いたなどと自己変容を実感したことがうかがえた。

五 おわりに

鹿児島大学の教授から「卒業生に一年生ながらいつも鋭い質問や的確な意見を述べ、しっかりとしたレポートを提出する学生がいる。理由は高校の探究活動で身に付けた。」という内容のお褒めの言葉をいただいた。成果が見えにくい探究活動ではあるが、密かに実を結んでいると実感した。生徒の無限の可能性を引き出すために今日も挑戦し続ける。



甌島の素晴らしさを味わい

子供の力を信じた教育活動

長浜小(北) 宇都宮 義彰

一 はじめに

本校は、薩摩半島の西方約五十キロの東シナ海に浮かぶ甌島列島の中で最も大きい下甌島の中央東部に位置する、創立百四十三年の学校である。校区内には、航空自衛隊の分屯基地、Dr.コトー診療所を取り上げられた「ナポレオン岩」がある。令和二年に「甌大橋」が開通し、従来、上甌島と下甌島の往来はフェリーであったが、車での往来ができるようになり利便性が向上したため、観光客も増加している。

平成二十四年に青瀬小学校、平成二十五年に西山小学校が閉校し、本校と統合されたため、本校区の面積は非常に広範囲にわたる。全児童の約七割が自衛隊、教員を家族に持ち、地元の子供はごく少数ではあるが、地域全体で子供たちを見守っていただけ、とても協力的な土地柄である。

二 甌島の特性を有意義に生かす活動

甌島には、美しい海をはじめとする数多くの観光資源がある。そして、その自然からたくさん之恩恵を受けていることを実感させたいと考えている。

(一) 海に触れる活動

明治後期の長浜地区は、半農半漁で自給自足の生活であったという。以来、多数の船がひしめいていたが、その船の多くの動力は「槽」によるものであった。本校では、二艘の和船があり、夏になると地域の方の指導で「和船遊び」「槽こぎ訓練」を行っており、当時は偲ぶ体験活動をしている。

(二) 海岸清掃活動

長浜港ターミナルの近くに、狭小の砂浜があり、PTAの協力をいただき、清掃活動を全校児童で行っている。漂着物が多く、大量のペットボトルや海外からの漂着物に驚いている様子が見られた。この経験がゴミ問題について考える礎となることを願っている。

(三) 島立ちに向けて

甌島には高校がなく、中学校を卒業すると「島立ち」を行い、家族と離れて生活をするようになる。その島立ちに向けて、義務教育段階でどのような資質を身に付けさせるかを海星中学校区全体で連携しながら指導に当たっている。

三 子供の考えを引き出す指導

どこの学校でも「子供の自主性」を重んじていると思われるが、それが、果たして子供のニーズと教員の思惑とマッチしているかが疑問であった。マッチしていなければ子供に残るのは「やらされ感」である。

そこで、重要なのは子供が「自分で決めた」と思わせることだと考える。したがって、指導において決定と思考場面の設定を多用することを各担任にはお願いをしている。

例えば、「子供が『どうしたらいいですか?』と尋ねたら、即回答するのではなく『あなただったらどうする?』と聞き返すなど、子供の意見を引き出すようにし、教員の思惑とおりになるような誘導を控える指導である。その意見を尊重し、子供に結果を見届けさせる。成功したときは自信につなげ、失敗したときは改めて一緒に考える。些細なことではあるが、このような日常の積み重ねが、予測困難な状況にも対応できる力を身に付けられると信じている。

四 おわりに

本校二年目の勤務であるが、毎日が変化の連続である。その変化の一つ一つに楽しさを感じている。そして、楽しみながら学校経営ができることへの幸せも感じている。子供たちや保護者、地域の方々、そして本校職員に感謝しながら、本校に関わるすべての人が楽しむことのできる学校経営を追求していきたい。



地域から学び、地域を愛する、 未来に向かって堂々と生きる子供を目指して

屋仁小(大) 日置 ゆかり

一 はじめに

奄美市笠利町の北西部に位置する本校は、緑の山々と東シナ海に面しており、奄美市一集落一ブランド「たあまん(田いも)」の産地でもある。地域と学校の連携は強力で、これまで九州ブロックPTA協議会、日本PTA全国協議会より表彰。今年度、PTA文部科学大臣賞を受賞した。地域で学び、地域を愛する子供たちの活動をここで紹介したい。

二 特色ある教育活動

(一) ウミガメ保護活動

近年、環境汚染等の問題から海の生き物たちもその生体が危ぶまれている。本校のすぐそばにある海岸地形も少しずつ変化し、広がった砂浜も狭くなってきている。ウミガメが産卵に訪れても、卵に海水がかぶり孵化しにくい。そこで、校庭に作った孵化場に卵をそっと移し、孵化する約六十日間気温、湿度、土の温度を計りながら見守っている。また、ウミガメが卵を産みや

すい環境づくりのため、地域と一緒にあって海岸清掃を行っている。放流時には、地域の放送で呼びかけ、子供、保護者、地域と一緒にあって、海に帰る子ガメを見送るのである。奄美の自然をいつまでも大切にしたい、自分も相手も大切にす自他の尊重を地域と共に培っている。

(二) まーじんゆらおうでー

「まーじん ゆらおうでー」と、聞いただけでは何のことかわからないであろう。奄美の方言でまーじん＝一緒に、ゆらおう＝皆で集い語り合いますよ、という意味である。本校でも、方言を聞いたり話したりする時間ももちろん、地域のゲストティーチャーをお招きして、三味線や八月踊りを教わっている。八月踊りでは、古くから伝わる歌詞に合わせて、ちぢんや三味線を鳴らし、旧暦八月の「アラセツ」「シバサシ」の日に、地域と一緒に踊るのである。地域の行事に、三味線や八月踊りは欠かせ

ない。

(三) 屋仁デイキャンプ

夏休み。子供たちにとって楽しみにしているのがデイキャンプである。この日は、奉仕作業、海でのアクティビティ、飯盒炊飯、郷土料理作り、親子読書読み聞かせ、と盛りだくさん。海でのアクティビティでは、学校にあるカヌーを出して保護者の方々がサポートしながら海遊びをする。郷土料理は、地域の方から料理、お菓子と作り方を学び、これもまた一緒にあって味わうのである。今年度は、このデイキャンプに加え、夕方から「屋仁音楽祭」も開催された。子供たちだけでなく地域に関わる音楽活動をされているメンバーが、地域全体を盛り上げてくれた。音楽を通して、みんなの心が一つになり思い出となったキャンプになった。

三 おわりに

本年度、教育振興基本計画が新たに打ち出された。そのコンセプトの一つに「日本社会に根ざしたウェルビーイング」がある。自己肯定感、協調性、社会貢献等、地域全体で子供を育てていく基盤がここにはある。自分も相手もよりよい社会の担い手となるよう一人一人が輝く教育に努めていきたい。地域から学び、地域を愛する、未来に向かって堂々と生きる子供を育てていきたい。



君ができる限り

三島片泊学園(郡) 久保 浩 昭

校長として赴任し、一年半が過ぎようとしている。「校長先生」と呼ばれることによりやく慣れてきたが、時折、あのときの判断は正しかったのだろうかと思ふこともあり、時には「眠れない夜」もある。

校長としての責務は重大である。困難な状況に直面したとき、教育委員会や周囲の校長、教職員、地域の方々から力を借りて最終的な決断を下し、これまでなんとか乗り越えてきたことに感謝している。

さて、来年は校長として最後の年を迎える。

温かく受け入れてくれた子供たちや職員、地域のために、自分に何(恩返し)ができるか考えている。そんなとき、初任校でお世話になった校長先生が、紹介してくださった、イギリスの神学者ジョン・ウエズリー氏の「行動の基準」の中にある一節を思い出した。

君ができる限り、

君ができるすべての善を行え、

君ができるすべての手段で、

君ができるすべての方法で、

君ができるすべての場所で、

君ができるすべての時に、

君ができるすべての人に、

君ができる限り

とても深い言葉である。校長先生はこの文の中で、『すべて』という部分に一部気になる点がある』と語り、それは、『すべて』というのではなく、『すべて』から行動し、自分で『できる限り』の可能性を発揮しなさい。そして、できることを少しずつでも積み重ね、誠実に事に当たっていくことも大切です。』と述べた。

教育の原点はへき地教育にあると言われる。

素直な児童生徒たち、子供のために尽力する地域社会・保護者、一人一人の子供たちを輝かせるために奮闘する教職員たち。このような環境の中で校長が道を示し、的確に指導・助言する。今求められている学校の姿がここにはある。学校経営方針を実現するために、自分の可能性を十分に発揮し、取り組む過程で喜びや生きがいを感じ、自信をもって経営していきたい。自分でできる限り……。



先輩方、私の解釈で

よろしいですか？

平尾小(北) 平 峯 剛

教師生活三十一年。校長として四年目。

今回、執筆の機会をいただき、たくさんの先輩方や赴任させていただいた地域、その地で出会った人や子どもたち。振り返ると、本当に恵まれてきたことに感謝しかない。

さて、今までの出会いの中で、たくさん思いや願いが込められた言葉やメッセージをいただってきた。今回は(二回目はないと思います)が・・・)初任校で先輩方からいただいた「会議等で一回は質問」「教師は俳優」「みんなに好かれる教師」の三つの言葉を記したい。

まず、「会議等で一回は質問」である。(会議中に決して私が寝ていたわけではない。)これは、何も分かっている私が質問をすることで、お互いが学び合うということであったのではない。質問する側は勿論のこと、質問された側は、相手が誰であろうとも理解できるように話さなければいけない。保護者や子どもにも理解

できるように伝える重要性を示唆されたのだろう。

次に、「教師は俳優」である。授業や子どもとの関わりの中で、オーバーに演じることは相手との距離が近づく。また、自分の中に冷静な自分がいることは、負の感情での指導を妨げることができていることを伝えてくださったのだろう。

最後に、「みんなに好かれる教師」である。子ども、保護者、地域の方、そして同僚のみんなに好かれる教師。そのためには、たくさんの人と語り合い、その人を理解し、自分が相手のことを心から好きになり、しっかりと大切な人であることや好きであることを伝えていくことが重要ではないだろうか。

先輩の言葉は、私の解釈で正しいかどうかは分からないが、私の教師生活に大きな影響を与えてくださった「心に残るひとこと」である。ぜひとも機会をつくり、先輩方と語り合いながら感謝を伝えるとともに、確認したいと思う。

人と人との出会いは

「偶然」ではなく「必然」

下名小(隅) 早 崎 雄 一 朗

送別会の際、当時の校長先生が話された言葉である。私自身に直接ということではなく、学校を去り、新天地へ向かう先生方に対しての挨拶の中に出てきた言葉だと、記憶している。なぜかはよく分からないが、当時、この言葉が妙に心に突き刺さり、その後の自分の生き方や考え方に強い影響を与えている。まさしく、「ストン」と、心に落ちたという感じであった。

読んで字のごとくシンプルな言葉であるが、それまで出会いということに対してそれほど意識することはなかった。しかし、この言葉のように、出会いを「必然」と捉えようと、その一つ一つが意味をもつ。つまり、出会う人は、わざわざ自分の前に現れて、何かを伝えに来てくれた有り難い存在となる。しかし、出会う人は、必ずしも肯定的な人ばかりとは限らない。時には、厳しい言葉で叱責する人やこちらの思いどおりにならない人等、一定数いることも事実で

ある。「ああ、この人に出会わなければ苦しい
思いやきつい思いをすることもなかったのに。」
と、悩むことも多々ある。それまでの自分は、
少なからずそのような方々とは距離をとってい
たし、自ら避けていたこともあった。しかし、
この言葉を耳にしてから考えは変わった。自分
と関わってくれる全ての人は、自分にとって必
要な人であり、様々な示唆を与えてくれてい
るんだと。だからこそ、今ここに現れてくれたん
だと。

それからの自分は、どの方々との出会いも前
向きに捉えられるようになった。校長という職
になった今は、新たな出会いの連続である。自
校の児童や職員はもちろん、保護者や地域の
方々等、数多くの出会いがある。その方々全て
が、自分に足りない何かを教えてくれる大切な
存在。「今、目の前にいる人はね、あなたにと
って必要だから現れたのよ。」そんな声が聞こ
えてきそうである。今後も新たに出会う人はま
ずまず増えていくだろう。その一人一人が、今
の自分に何かを教えに来てくれた大切な存在な
のだということ胸に、新たな出会いを楽しみ
たい。

耐雪梅花麗 経霜楓葉丹

吉田北中(市) 鮫 島 讓

「耐雪梅花麗 経霜楓葉丹」(雪に耐えて梅花
麗し 霜を経て楓葉丹し) 皆さん御存じのと
り、西郷南洲の漢詩の一節である。この漢詩は、
西郷の甥がアメリカ留学の際に贈った詩で、梅
の花は、雪の冷たさに耐えてはじめて美しく咲
き、楓かえでの葉は、霜を経てはじめて真赤に色づく。
よい時も悪い時も、常に変わらず汗を流し続け
ることが大切だし、頑張れば必ずその報いがあ
るという意味だ。ヤンキースで活躍した黒田博
樹投手も、座右の銘としていたことは有名な話
だ。

さて、私が高校生の時、部活動と勉強の両立
に四苦八苦して、どちらも疎かになっていた時
のこと。その日も適当に練習して、帰り支度を
していた時、練習を見ていた担任の先生から呼
び止められた。

「最近、授業中集中してないと思ひ、気に
なつて見に来たら、部活動も気が抜けた練習を
しているんじゃないか。」

見透かされたようで口ごもると、

【耐雪梅花麗、経霜楓葉丹】これは西郷隆盛
の漢詩の一節だが知っているか？」

その後先生は、よい時も悪い時も、常に変わ
らず汗を流し続けることの大切さ、歯を食ひし
ばって頑張っていれば、必ず報われるというこ
とを、一語一語噛みしめるように話された。静
かに語る先生の言葉に、自分の弱さを痛感し、
情けない自分を恥じた時だった。

あれから数十年、様々な場面で漢詩がよみが
える。生徒指導困難校にあつては、若い職員ら
と「雪に耐えて梅花麗しじゃつど。ここを凌げ
ば必ず報われる。」と、励ましながら一緒に頑
張ってきた。難しい保護者対応では、粘り強く
丁寧な説明を続け、理解を得て円満解決できる
と「梅花麗しじゃつたな。」と、喜び合った。
困難な場面を乗り越えるときのお守りのような
存在となつていた。

今、校長室の机には「耐雪梅花麗 経霜楓葉
丹」と、書かれた紙が張り付けてある。私にと
つて心の支えであり、今後の生き方の指針とも
なる大切な言葉である。



子供のやる気を引き出す

運動会での学校長挨拶

大崎小(隅) 堀内 賢 徳

朝の挨拶をしましょう。おはようございます。いよいよ待ちに待った運動会の日がやってきました。令和五年度大崎小運動会が、ご来賓の皆様のご列席を賜り、このように開催できることを大変ありがたく思います。

ご観覧いただいております皆様申し上げます。本日は本校運動会をご観覧いただき、誠にありがとうございます。子供たちは、自分のもてる力、自分たちでやりきる力を精一杯出して

くれるものと信じております。どうか惜しみない拍手と大きな声援を子供たちに送っていただきますよう、よろしくお願いいたします。

さて、児童の皆さん、本年度のスローガン「心を燃やせー力を合わせて光り輝く大崎っ子」の下、一生懸命練習をしてきましたね。難しかったこと、しんどかったこともたくさんありました。しかし、仲間や先生、さらにはお家の人に励まされ、素晴らしい演技ができるようになりました。今日は、自信をもって、仲間を信じて、思い切りやってください。

一年生、初めての運動会ですね。ダンスもすっかり踊れるようになりましたね。応援団も团长を中心に、昼休みを返上して練習を積み重ねてきました。工夫した力強い応援合戦を楽しみにしています。

そして、六年生。最後の運動会ですね。最後まで全力でやりきったね、楽しかったねと言える、思い出に残る運動会にしてください。

なお、本日は気温の上昇が予想されます。水分補給を十分にしてください、熱中症等の予防に努めてください。最後に児童の皆さんに、一生懸命頑張った人には、大きな自信が、声をかけ合い支え合った仲間には、大きな感動があり

ます。そして、見てくれているたくさんの人たちに必ず伝わります。皆さんはもちろん、大崎小学校に関わっていただいているすべての人々の心に残る素晴らしい運動会にしましょう。皆さんなら、きっとできます。大いに期待しています。

「立会演説会」講評

串木野中(日) 森 本 信 一

立候補者の皆さん、立会演説ご苦労様でした。演説の中で、自分の考えや思い、やりたいことをよくまとめて発表してくれました。学校や生徒のために頑張りたいという気持ちがよく伝わり、本当に頼もしく思いました。日頃の学業や部活動、習い事など忙しい中でもみんなのために更に役割を買って出る、一肌脱いで仕事をしたいと考え実践することは、なかなかできることではありません。素晴らしい奉仕の精神と高い志に触れ、大変うれしかったですし、感謝の気持ちでいっぱいです。

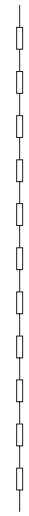
学校は皆さん一人一人がそれぞれの役割をしっかりと果たさなければ、落ち着いた場所にはなりません。一人一人がみんなのためという思いで生活することによって、学校生活は成り立っています。その中で、計画を立て、皆さんに提案し、学校をより良い方向へ導く生徒会役員の仕事はとても重要なものです。自らが率先して、みんなのために働く。毎日のことであり、大変な仕事です。今日、立候補してくれた皆さんは、自ら進んで、その仕事を引き受けようという、素晴らしい思いを持って演説してくれました。この思いに伝えるために生徒の皆さんはぜひ、清き一票を投じるとともに、立候補をしてくれたすべての皆さんとともに、串木野中学校の生徒会活動に今後も惜しみない協力をお願いします。

また、応援者の皆さんは、今週、給食時間に応援する立候補者の人柄や、日頃の生活の様子など、その人の良いところをよくつかんで紹介してくださいました。その視点に思いやりやさしさが感じられ、温かい気持ちになり、大変うれしかったです。ありがとうございました。

最後になりましたが、選挙管理委員の九名の皆さん、これまでの準備や演説会の運営ご苦労

様でした。まだこれからが一仕事ですが、最後までよろしく願います。

以上で、講評を終わります。



秋の深まりと読書のススメ

吉松中(始伊) 下小野田 秀樹

先週、正門の両脇にあるキンモクセイとギン

モクセイが満開となり、ちょっとした風の具合でふつと香りができて心地よい日々を過ごすことができました。これらが香る頃から寒さを感じるようになります。黄金色に光っていた田んぼの稲も刈り取られていきました。先日は定番なのですが「実るほど頭を垂れる稲穂かな」について、全校朝会で話しました。ことわざのことも活かされることを望みますが、垂れていく稲穂を実際に見ることができると幸せも感じてほしいと思っています。昨日、魚野地区から「雲海」を撮影するために多くのカメラマンが集まっている様子が、「吉松に雲海が発生した」というニュースとともに報道されました。今

はまだ気づかないでしょうが、育った故郷のことをしっかりと見て、感じて、愛着を持って成長してほしいと願います。

さて、秋は「読書の秋」とも言われます。最近の高校入試や大学入試は「読解力」が求められています。例えば理科の問題でも文章量が多くなっています。そのため、各教科で速く読み進める力も求められています。本校に目を向けると、読書の楽しさを知りたくさん読んでいる生徒もいるのですが、読まない生徒はほとんど読んでいない実態があります。

読書の効果について調べてみると、「知識・智恵が増える」、「語彙力・文章力が向上する」、「想像力・記憶力が高まる」など次々にたくさん出てきます。「読書の秋」に面白そうなお本を見つけて読むことの楽しさを知って、読解力を高めて欲しいと思います。

終わりに、近頃は面白いオジさんのキャラクターとなりつつある元プロレスラーの長州力さんが発した、重みのある言葉を紹介します。

「努力しても成功するとは限らない。でも成功している人は必ず努力している。」

話のひろば



山で吠える

平川小(市)

日置 正 齊

これといった趣味はない。しかし、ふつとやりたくなるものがある。山に行くことである。山

に行くときは準備が大事だ。私の山準備はこうである。まず、ゴム手袋、これはどこでもある赤地のもの。愛用のなた鎌は、山道を歩くいい相棒だ。充電式の枝切機は、学校主事が使っていて片手でほんぽん切っている手際の良さに惹かれ、アマゾンで購入した。ゴム底の海釣り用の長靴は、これまでの農作業用のものからチェンジした。濡れた岩場や丸太の上歩きに安定感がある。夏は、蚊取り線香もだが、帽子ごとすっぽり入る虫よけ網もいい。お陰で、ぶともあぶもはちも怖くなくなった。現地では、日によって草刈り機かチェーンソーを選んでいく。カッブ麺とコーヒーも忘れない。家族の「また行く

の。」の目線をよそに翌日の計画に余念がない。田舎の山に行く。山はいい。特に、秋と冬。しかも、冬枯れがあり、枯れ葉がかさかさしていれば作業が実に楽だ。寄って来る虫たちもない。汗をかく分には山仕事は申し分ない。この夏、念願の五キロ減を達成できたのも山の魅力アップしている。

山は、主に孟宗竹林、檜杉山、手つかずの原生林の三種に分かれている。竹山で倒竹を片付け、檜山に入る。さらに入るためには、竹や木の乱立の中に突入し、風通しと木の幹を見せるようにして整理していく。原生林をかなり上がつて行けば岩場が数か所ある。巨岩であり、場所が変わらないので、格好の休憩所にもなる。岩場の前にかかっていた枝打ちをすると、遙か遠くの景色が見えてくる。何かのつかえがとれ、すっきりとした気持ちになる。遠くかすかに飛行機の音がする。携帯で探すと香港行きと示されていた。「ああ、外国に行く人もいたなあ、自分たちはここにいな、昔からここにいた人もいたな。」と古い記憶が呼びさまされる。しまいまで山を払い、竹を整理し、枝をうち、古い石垣についた草を取ったりしながら振り返る。「なかなかきれいになったな。」と少し満足する自分がある。そして、家族や、学校や、学校の子供たちや、職員や、行事のことを思い、

またそこに戻りたくなっている自分を発見する。

簡潔な言葉の力

安良小(始伊)

松 元 美 和

大変だったのが、やりがいと喜びの多かった教頭時代。それが一転、校長になってからブルーな日が増えた。その理由の一つがあいさつだ。「校長先生からごあいさつを」と言われるたび、「え

…」と憂鬱になる。校長一年目ならまだしも、もういい加減観念すればよいものを。人前に立つと、校長として立派なことを言わなければと思うからだろうか。長々と、何を伝えたいのだろうというあいさつを聴くと、自分を見ているようで心が痛くなる。もつと短く簡潔な言葉で思いを届けられないものか。

簡潔だが、私を励まし続けている言葉がある。それは父の言葉だ。父のお友達が生前の父に、「美和ちゃんは女性で教頭をしていて大変だろうね。」と言うと、父は「いやあ。美和はわたしに似て、根性があるでやあ!」とうれしそうに語っていたと、父の初盆で伺った。父の飾らない笑顔が目につかぶ。娘を信じる力強い言葉。

校長として落ち込む日々だったが、百万言の励ましよりも、私をたくましく方向転換してくれた。

亡き母の言葉もしかり。子供の頃、私が知りたいことをつぶやくと、母は本棚からうれしそうに百科事典を持ってきて一言。「これに載ってるかな。」と。時代劇を観ては將軍の系統図を。アルパカの毛刈りのニュースを観ればその生息域を。一緒にそのページをのぞき込み、「へえ！ そうなんだ！」と感動する私を優しい笑顔で見ている。知ったかぶりをして説明せず、調べる楽しさを教えてくれた母の簡潔な一言が、私の好奇心を育ててくれた。

恩師が、語ってくださったことがある。(概要) だれにも「わかりやすい言葉」で「わかりやすい事実」を通して、目指すべきあり方を伝えよう。語った言葉はその人の心に生きてこそ意味がある。単なる難解さは自己満足にすぎない。自分の知を誇るためではなく、「相手のために」対話する。「わかりやすい」ということが相手を思う気持ちの発露なのだ。

「大人は己なし」恩師や親の生き様を思うとき、校長としてどう思われるかでなく、目の前の人のために何を願ひ、どんな簡潔な言葉で心に届けるかを問い直したい。「己」がしやしやり出てくる自分に「それ、誰のため？」と自問

自答しながら、「向き不向きより前向き！」であいさつに臨みたい。

忘れ物を探しに

万世中(南)

神田良文

本校の教育目標は「確かな学力を身につけ心豊かでたくま

しい生徒の育成」である。教育課程編成方針を説明する際に、先生方と「たくましい生徒」について意見交換を行った。たくましい生徒とは「目の前の困難を乗り越え目的を達成する生徒」と捉え、来年度の教育課程を編成することになった。本校では、ほとんどの生徒が学習や部活動に一生懸命に取り組んでいる。しかし、中には「宿題が終わってないので学校を休みます」等の連絡を保護者から受けることがある。個別に対応しながらも、この生徒たちが大人になったら大丈夫なのだろうかと不安になる。

教頭の頃であったが、校舎の鍵を開けていると、教室をのぞいている人がいた。不審者かと思ひ声をかけると、「孫が制服を忘れたので教室に入れてくれないか」とおじいさんに懇願された。制服がないと学校に行かないとごねてい

るらしい。「体育服で登校させてください」と言っても帰ろうとしない。おじいさんに制服を取りに行かせるなんてどんな生徒や親なのだろうかと思うと、目の前のおじいさんがだんだん可哀想になった。「次は本人に取りにこさせてください」と話し、教室にあった制服を渡した。私には、孫思いのおじいさんの気持ちを感じ取りに行かせた生徒や親に伝わるとは思えなかった。せめて、生徒が感謝して受け取ってくれば、おじいさんも救われるのかなと思つた。

また、ある日の放課後、職員室にいと、母親が「娘に渡してください」と合羽を預けて帰っていった。突然の雨に子どもが困るだろうと合羽を届けたのである。合羽を着て自転車帰ってこいということである。少し待てば車でいっしょに帰ることができるのに、敢えて合羽を届けた母親に感動した。自分はこの母親のような愛情のある厳しさで、子どもたちに接していたらどうか。ふと見ると、突然の雨に、職員室前の公衆電話に長蛇の列ができています。

自分の教員生活を振り返り、何か忘れ物をしたような気がしてならない。

読書案内



■キリーロバ・ナージャ 著

6カ国転校生 ナージャの発見

東昌小(市) 祝原佳苗

本書は、小一から中三まで六カ国の学校に通った著者の目を通して、各国の学校の違いを書いたユニークな本だ。旧ソ連のレニングラードで生まれた著者は、数学者の父と物理学者の母に連れられて、ロシア→日本→イギリス→フランス→日本→アメリカ→日本→カナダ→日本と六カ国を転校した。毎年違う言語を学び、義務教育年数が国によって違うため、小学校を三回卒業した。国が変わると学校生活は全く異なる。鉛筆を使う日本、イギリス、アメリカ、カナダ。

ペンを使うロシアとフランス。鉛筆は消すことができるため、たくさん書くことができる。ペンは消すことができないので、よく考えてから書かなければならない。どちらかが正解というわけではなく、書いている子どもが何を学べるのが大切だと、著者は書いている。水泳の授業では、日本は形重視、ロシアはスピード重視、アメリカでは海で溺れた時のために長く浮くことが重視される。各国の学校が全て同じではないかもしれないが、学校生活の細部には、その国の文化や価値観が色濃く反映されているのだろう。こうして幼い頃に教えこまれたことは、大人になっても容易には消えない。

また、タイトルにある「発見」は、大人になった著者の回顧によるものだとということにも注目したい。子どもが様々なことに気づくのは、おそらく、彼女が自分の環境を選べる立場にはなかったからではないか。子ども時代の著者が、それぞれの国で、学校のよさを見つけようとしたように、子どもは与えられた環境の中で、自分でサバイブする方法を見つけようとする。それは、「ずっと正解が変わり続ける環境の中で、誰かの正解は、必ずしも自分の正解ではないことに気づいた」というナージャの言葉にも表れている。だからこそ、環境をつくる側の大人が、

教育システムにおける当たり前を見直し、あらゆる問いに一つ一つ丁寧に向き合うことが、大切なのではないかと感じた。

集英社インターナショナル 二二〇〇円

■森 絵都 著

ぼくだけのこと

大勝小(大) 徳永由美子

初めて教壇に立ったのは、中学校だった。「中学生なら、分かるよね。できるよね。」そう思っていた。しかし、私の前にいた中学生は、必ずしもそうではなかった。「おはよう。」と、言えないのは、「おはよう。」と、言われたことがないから。感情のままに手が出してしまうのは、感情のままに手を出されたことがあるから。他に術を知らない子どもたち。私が、国語教師としてはじめたことは、毎時間、読み聞かせをすることだった。時間は五分間だけ、読むのは優しいまっすぐな言葉で語りかける絵本と決めた。すると、不思議である。何度声を掛けても

顔を上げなかった子が、絵本の間だけは顔を上げようになった。授業の邪魔をしているとか思えなかった子が、「もつと読んで。」と、言うようになった。もちろん、それで全てが解決、授業もばつちり、とはいかなかったが、それでも私は、「人として本当に大切なことは、全部、絵本の中にある。」と、思うようになった。そして、管理職になり、小学生と出会って、その思いはより強くなった。

今年も、六年生に読み聞かせをする機会があった。選んだのは、森絵都さんの『ぼくだけのこと』。人にはみんな、ぼくだけのことがある。嬉しい楽しい嬉しきだけのこともあれば、悲しい辛いほくだけのこともある。もしかしたら、嬉しい楽しいことだけがいいと思うかもしれない。悲しい辛いことはない方がいいと。でも、この絵本は、そうじゃないと、教えてくれる。どっちもあるからいい。自分の全部を受け止めよう。自分をちゃんと受け止めて、自分をちゃんと大事にしよう。そう教えてくれる。

「あさ、まちのむこうからたいようがのぼって、よる、まちのむこうにしずんでいく。(中略) そのあいだに、きょうもみつけよう。ぼくだけのこと。」

この子どもたちが、今も、五年後十年後も、

ぼくだけのことを見つけ、その全部を受け止められますように……。願いを込めて読んでいます。

理論社 一二〇〇円

■坂本光司 著

日本でいちばん大切にしたい会社

皆与志特支 井上隆 司

「日本でいちばん大切にしたい会社を挙げてください。」と言われたら、どんな会社を想像するだろうか。わたしは、トヨタやホンダ、ソニーのような世界中の人々が知っている有名な会社を思い浮かべた。しかし、本書で取り上げるのは、そのような有名大企業ではない。どちらかといえば、社名をあまり知られていない中小企業ばかりである。

著者の坂本氏は、全国の会社を実際に訪問して、未来に残すべき優れた会社の条件として次の五人に対する使命と責任を果たしていること、五人を幸せにすることを挙げている。

一番目が社員とその家族。二番目が、外注先。

下請け会社の社員とその家族。三番目が顧客。四番目が地域住民。最後の五番目が株主などの出資者だという。「お客様は神様」などという言葉がある日本で、顧客よりも社員や下請け会社の社員の方が優先されるという。社員が、その会社に不平や不満があるような幸せでない状況で、顧客に満足してもらえないような商品やサービスを提供することはできないというのが、著者の考えである。社員や下請け企業の社員、顧客、地域住民から好かれ、みんなが応援したくなる会社であれば、出資者もその株を持つていることを誇りに思い、みんなが幸せになるといふ。そんな会社が本当にあるのか、そう思われた方は、ぜひ本書を手にとって確かめてほしい。

さて、かたや学校はどうだろうか。学校は会社とは違う。だが、ブラック企業などと揶揄される今の学校という職場に、自分の教え子を就職させたいと心から思えるだろうか。

教職員みんなが自分の学校を誇りに思い、「教職は、幸せな子どもたちを育てるための素晴らしい職業だよ。」と教え子に胸を張って言うようにするためには何が必要なのか、本書から学ぶこともあるのではないだろうか。

あさ出版 一五四〇円

「趣味」の意味を調べると、「好きでしていることや、好きなことを深く知ろうとすること」とある。私のこれまでの教員人生を振り返ると、自分が好きなこと、自分が楽しいと思えることに挑戦していたら、「免許・資格取得」につながり、仕事に役立ったり、日常に生かせたりしている。そこで、それにまつわる出来事を、ここで紹介したいと思う。

きっかけは、司書教諭講習を受講していた際の講師の話である。「資格や免許は、いくつ持っていても重くて負担になるものではありません。私は、この免許を持っていたからこそ、道が開け、今、充実した日々を過ごすことができます。」と、その学校

趣味・文芸

好きなことをしていたら・・・

池田小(南) 桑原 千恵子

図書館司書の方は話された。そして、「私が違う職場に勤務しているとき、学校図書館司書の募集があり、免許を持っていた自分に『やってみないか』という誘いを受け、今、学校図書館司書という仕事を通して、子供たちと関わり、読書の楽しさを伝える楽しさを味わっています。」と笑顔で語られた。これらの言葉がその当時の私の心に響き、その後、自分が好きなこと、楽しいと思えることを学ぶことで、いくつかの免許・資格取得に挑戦していくこととなったのである。

夏季休業中の司書教諭講習が終わり、二学期に入ったある日、職員室に回覧されていた放送大学の資料が目が留まった。そこには、ずっと勉強したいと思っていた養護学校教諭免許に関する内容が掲載されていた。私は、今年度中に

免許を取得するという目標を設定し、その日のうちに放送大学の資料を取り寄せた。資料が届くとすぐに、放送大学への入学手続きをし、養護学校教諭免許状を取得するための勉強を始めた。テキストを読んだり、放送を視聴したりしての学びは、これまで経験してきたことを改めて学び直したり、学んだことが専門的な知識として増えていき、とても充実した日々となった。

小型船舶教習所に通い、取得したのである。最初は、甌島に赴任した思い出にと軽い気持ちで挑戦したことだった。しかし、船長の心得や水上交通の特性などを初めて知り、陸上交通とは違う思わぬ危険が常に伴っており、一歩間違えば取返しのない悲しい結果を招くことを学び、小型船舶操縦士の免許を取得する重みを感じた。また、海図の見方や航海計画表の作成は、初めて聞く用語が次々と出てきて、とても難しいものだった。しかし、新しいことを学び、知識として増えていくことは同時に楽しみにもなっていた。そして、学科試験と実技試験に合格し、無事に一級小型船舶操縦免許証を取得することができた。昨年度は、

二度目の免許更新があり、船長としての事故対応について講義を受け、免許を持つことの重みを改めて学んだ。

ずっと通っていた。華道教室で出会う様々な職業の人々の話を聞くこと、今まで名前も聞いたこともなかった花などの知識が増えていくことは、とても楽しい日々だった。華道教室の次の日には、教室に花器を持ち込み、多くの珍しい花材を、もう一度生けた。そのときの子供たちの反応も、毎週の私の楽しみになっていた。そんな楽しい日々を過ごしているうちに、免許と看板をいただくことになった。

また、教頭として赴任した甌島では、一級小型船舶操縦士の免許証を取得した。夏季休業中に勤務が終わってから、近隣の教頭先生たちと

資格マニアというほどではないので、趣味とはいえないとは思いますが、免許や資格取得が今の仕事にもつながり、視野を広げていると感じている。最近では、赴任先の都合で中断していた和楽器の練習を始めた。教えられたとおり美しい音色が奏でられたときの喜びは、次への意欲になっている。

自分が好きなこと、自分が楽しいと思えることが免許や資格取得につながった私のこれまでの出来事は、常に学び続けることの楽しさや大切さを私に教えてくれたと感じている。

郷土の紹介



鶴岡第二中との兄弟校盟約を

通じて郷土を誇りに思う

武中(市)前 田 浩 二

一 根性坂で日々鍛錬

高低差約一〇〇m、距離約七五〇mの上り坂を生徒たちは毎朝上ってくる。特に、市道から校門までの坂を「根性坂」、グラウンドから生徒玄関までの最後の急坂を「根性坂」と呼び、汗をかき、息を弾ませながらの登りは、まさに鍛錬そのものであり、本校の伝統になっている。

しかし、坂を上り切った後の校舎から見える風景は格別で、眼下に並ぶビル群とその後方に広がるきらきらと輝く錦江湾、そして、青空をバックに荒々しくも神々しい姿を見せる桜島。時折、船の汽笛も聞こえてくる。

卒業生にとって、この根性坂での鍛錬と眼下に広がる素晴らしい眺望が、



本校からの素晴らしい眺望

二 第六中学校として開校

本校は、昭和二十二年に鹿児島市立第六中学校として、武小学校、田上小学校の校舎を借用して開校し、昭和二十四年には、鹿児島市立武中学校へ校名が変更された。そして、昭和三十八年に現在の高台に校舎を新設して移転してきた。創立七十七年目になる。現在、生徒数四九〇人、一五学級である。

三 鶴岡第二中学校との兄弟校盟約

校区内の武には西郷屋敷跡がある。これは、西郷南洲翁が征韓論にやぶれて帰郷後、明治六年から四年間、西南の役まで居住し、自らは、「武村の吉」と称し、農業の傍ら子弟の教育を行った屋敷である。

その西郷屋敷跡があるご縁で、本校は昭和五〇年、山形県鶴岡市の鶴岡第二中学校と兄弟校の盟約を結んだ。

庄内藩（現在の鶴岡市、酒田市他）は、戊辰戦争の折、官軍に激しく抵抗したため、降伏後は厳しい処分を覚悟していたが、「かつて敵であったとしても今こうして我々の要求を受け入れたのだから兄弟も同然ではないか。」という南洲翁の取り計らいにより、処分は極めて寛大なものとなった。このことに感激した庄内藩士たちは、後に鹿児島市の南洲翁の



鶴岡第二中を訪問したときの交流の様子

元に来て修行している。特に庄内藩の家老であった菅臥牛翁（実秀）は、南洲翁を兄と慕い、「徳の交わり」を誓い合っている。西郷屋敷跡には、両者の対話の座像が建立され、同じ像が山形県酒田市の南洲神社にもある。

郷土の偉人である両者が、学問を通して学び合い、親交を深め、郷土の発展に尽力された功績に習い、本校と鶴岡第二中は、二年ごとに交替で親善訪問団を派遣し合っている。互いの交流を深めることにより、郷土を誇りに思う気持ちを育みたい。

今年度は、八月に本校から生徒六人、職員二人（含校長）、PTA二人、後援会五人の総勢一五人で、鶴岡市を訪問した。熱烈な歓迎を受け、感激の三日間であった。家々の座敷に南洲翁の肖像画が飾られているほど、鶴岡市の方々の南洲翁への敬愛の念の強さとの交流をいかに大切にしているかということに肌身で感じた。両校の生徒たちも打ち解け、会話も進み、有意義な親善訪問となった。

ほかにも鶴岡第二中とは、習字や絵画等の生徒作品のやりとりやオンライン交流も行っており、お互いに繋がりが合っている。

今後は、菅臥牛翁が中心となって庄内藩士らによって編纂、発行された「南洲翁遺訓」を活用して、全校生徒で暗唱するなど、南洲翁の生き方や教えに触れる活動をしていきたい。令和七年度は、兄弟校盟約五十周年に当たり、鶴岡第二中からの訪問団を受け入れる年度である。今からしっかりと準備していく所存である。

難しいことを分かりやすくするとき 思考が深まっていく。

誰かに難しい内容を教えることは、それを深く理解し、言いあらわすことになる。



大浪の池と韓国岳

© K.P.V.B



提供「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏

一般財団法人校長会館だより

あけましておめでとうございます。本年も、どうぞよろしくお願ひします。
なお、今後の校長会館の行事予定は次のとおりです。

- 三月 五日(火) 理事会
- 三月十二日(火) 評議員会

教育長異動

- 再任 令和六年一月一日付
大崎町 穂園 正幸氏
- 再任 令和六年一月八日付
南九州市 有馬 勉氏

季節の言葉「睦月」 むつき

ひもじさの 餅にうれしき 睦月哉

正岡子規



編集後記



新年おめでとうございます。会員の皆様方とともに、令和六年を迎えることができました。今年も県連合校長協会広報部会の業務にご理解とご協力をよろしくお願ひいたします。

教職員も定年延長により、今年度六十才となる校長先生方から、役職定年の上、教諭として教壇に再登板することになります。体力的には若いころにはかないませんが、この立場を終えた今こそ「真の教育」が実践できると思います。氣力で日本の未来を担う宝子を育てていきたいものです。

さて、旧約聖書「コヘレトの言葉」第三章に以下のような詩があります。

天の下では すべての時機がある
すべての出来事に時がある
生まれるに時があり 死ぬに時がある
植えるに時があり 収穫に時がある

これは、私が中学三年生の英語の教科担任の先生が最後の授業の時に、旅立つ我々に送ってくれた詩です。四十五年近く経った今でも鮮明に覚えています。その先生は今でも退職校長会でお元気に活躍しておられ、何よりも嬉しいことです。私もいつまでも生徒の記憶に残り、心に灯をともすことができる教師になれたらいいなと思います。教師の仕事は、最近では「ブラック」などと揶揄されますが、深遠で意義あるものだと思っています。

最後になりましたが、校務ご多用の中、玉稿をお寄せいただきました先生方に厚くお礼申し上げます。令和六年甲辰(きのえたつ)の年、草木が勢いよく成長する年回りです。皆様方と皆様方の学校もますます発展することを心よりお祈り申し上げます。

今日はこらへんでよかどかい。

上ノ町 久(鹿児島女子高校)